

お名前	性別	満年齢	終戦時の年齢	現住所
富安 辰夫	男性	70歳	5歳	八名井

- ① 8月15日は、どこでどんなことをしていましたか。
たぶん、家で玉音放送を聞いたような気がします。
- ② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。
後日、家で何となく聞いたような気がします。
- ③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子
子どものことなので、周りの大人、祖父母も別に何も言ってくれなかったような気がします。
- ④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと

「記憶から消えない空襲の怖さ」

私は、満5歳で名古屋市瑞穂区船原町から八名井（父親の在所）に引っ越しました。当時、名古屋では毎晩のように空襲があり、母方の祖母に手をひかれて防空壕に逃げ込んだものです。まず、米軍機（偵察機）が1機で様子を見に来ます。すると、名古屋の高射砲の陣地から1本のサーチライトがその偵察機をとらえます。まもなく、他の陣地からもサーチライト4、5本が同じようにとらえます。偵察機は、ジグザグに進路をとり、逃げていきます。近所の人々は、たぶん拍手をしていたと思います。しかし、その後、子どもの私が眠りにつこうとする頃、とつぜん「空襲警報」という男の人の声と共に、近所の人みんなが近くの防空壕に逃げ込みます。

遠くからゴーゴーというB29爆撃機の飛来音が聞こえてきます。何百機という大編隊だったそうですが、あちこちに爆弾やら焼夷弾を落としながら近づいてきます。シュルシュルという音がして、近くに爆弾が落ちて炸裂したのか、壕が大地震のように揺れて、天井から土や小石が落ちてきます。ただただ、怖くて泣いていたことを覚えています。すると、男の人が大声でどなり、祖母が何かを私の口の中にねじ込みました。息ができないくらい苦しくて仕方ありませんでした。

後日、母から「あの時は、長時間泣いていると敵機の音波探知機（ソナー）で防空壕の位置が分かってしまう。すると爆弾を集中的に落とされ、全員が死んでしまうから、『泣いている子どもは首をしめて殺せ。』と言われた。それで、祖母が着物のすそを引き裂いて、私の口の中に押し込んで声が出ないようにしてくれた。」と聞かされました。



（写真提供…富安辰夫さん）

▲ 高射砲とサーチライト